

コミュニケーションのための中級日本語教育文法とは —留学生の日本語接触場面の教材化—

高屋敷 真人

要旨

関西外国語大学留学生別科の中級日本語コースでは、2008 年度より継続して、交換留学生を対象に、コース前のニーズ調査、コース中の日本語接触場面調査、そしてコース後の使用教材（教科書）についてのアンケート調査を行っている。本稿は、主に 2021 年度のコース前のニーズ調査の結果に基づいた教材作成について報告するものである。この調査の目的は、交換留学生の日本語学習のニーズを調査し、彼らが本当に必要とするトピックや接触場面からのコミュニケーション運用能力を高めるためのシラバス・デザインや日本語教育文法の再考を行うことである。

【キーワード】 中級日本語、ニーズ調査、接触場面、シラバス・デザイン、日本語教科書

1. 中級レベルでのアンケート調査の概要と調査結果

関西外国語大学留学生別科の中級日本語コースでは、2008 年度より継続して、交換留学生を対象に、コース前のニーズ調査、コース中の日本語接触場面調査、そしてコース後の使用教材についてのアンケート調査を行っている。これらの調査の目的や調査結果については、拙論「中級日本語教材作成のためのアンケート調査 (1) ~ (3)」(高屋敷 2018、2019、2020) に詳細が述べてあるので、本稿では割愛する。これらの調査結果の概要をまとめると、中級レベルの留学生への「どのような日本語接触場面で日本語を使用したいか」という問いに対する回答を分析した結果、「レストランで注文する」「ホテルの予約をする」など特定場面での談話練習ではなく、日本人（主として日本人の友人）と自分の興味・関心のある話題について日本語で話したいと回答した留学生、つまり、日本人の友人との「特定の課題の遂行を目的としてい

ない単なるおしゃべり」(西郷・清水 2018) がしたいという留学生の割合が 65%以上に達したということである。また、将来日本に行き自分の仕事で日本語を使用したいという回答も多く、翻訳者／通訳者を目指したいという学生も多かったことが明らかになった。

コース前に行われるニーズ調査は、関西外国語大学留学生別科中級前期日本語コース(日本語 5: Japanese、以下、JPN5)において、毎学期、本学の交換留学生を対象に行っている質問紙によるアンケート調査である。この調査では、主として交換留学生がどのようなトピック／場面で日本語を使用したいか調べているが、学期ごとの学生のニーズ、興味・関心には違いがあることも分かった。教員は、毎学期の調査結果から得たこうした学生のニーズ、興味・関心に沿うように、コースで使用する教材を常に更新していく必要があることも提唱した。アンケート調査の結果を具体的にどのように実際の教材に反映し更新していくかについては、後段で実例を示し説明して行きたい。

2. 2021 年度のニーズ調査の結果

2020 年度はコロナ禍の影響で、関西外大留学生別科も春学期の 2 月下旬から急遽オンライン授業に切り替えとなり、学期中に行われるログシート、インタビューによる詳細な接触場面調査を行うことが出来なくなった。9 月からの秋学期でも、留学生が来日できず、主にアメリカ、ヨーロッパにいる学生と ZOOM を使用したオンライン授業による開講となった。2020 年度に引き続き、2021 年度も関西外大留学生別科の日本語コースは春学期と秋学期ともにオンライン授業で行われたが、コース前のニーズ調査とコース後の使用教材(教科書)に対するアンケート調査は実施した。本段では、2021 年度のコース前の質問紙によるニーズ調査の結果を取り上げ、報告したい。

質問紙を使用したアンケート調査は、2021 年春学期(2 月から 5 月)と秋学期(9 月から 12 月)のコース前に行われ、アンケートの回答者は、JPN5 を履修した学生、26 名である。留学生のジェンダー、国籍は下記の通りである。また、英語でコミュニケーションが出来ることが関西外国語大学留学生別科における交換留学の要件の一つであるので、英語が母語ではない学生も第 2 言語として英語を習得している。

ジェンダー:	男子学生 11 名、女子学生 15 名
国籍:	アメリカ 9 名、ノルウェー 5 名、ロシア 2 名、 カナダ、オーストラリア、メキシコ、ホンジュラス、イギリス、 ポルトガル、ラトビア、イスラエル、デンマーク各 1 名 香港 1 名（イギリスに留学中）
母語:	英語 11 名、ノルウェー語 6 名、ロシア語、スペイン語各 2 名、 広東語、ポルトガル語、ラトビア語、ヘブライ語、フランス語、 デンマーク語各 1 名

調査対象者の専攻は、下記の通りである（ダブルメジャー含む）。

専攻：日本語／日本研究	16 名
アジア研究／東アジア研究	3 名
国際研究/国際関係	2 名
美術	2 名
経済	3 名
IT／コンピューター	2 名
薬学、工学、ドイツ語、中国語	各 1 名

はじめに、質問紙による「どのような場面で日本語を使用したいか？」という問いについてのアンケート調査の結果を図 1 に示した。図 1 によると、留学生の一番多い回答は、例年と同じように「将来の仕事で日本語を使用したい」で 16 名（約 62%）であった。希望する職種の記事があったものでは、翻訳家 4 名、日本語教師 3 名であった。「将来の仕事」に続いて、これも例年通り、日常生活で「友人と話したい」が多く、11 名で、それに加え、「とにかく日本人と話したい」と回答した 6 名を加えると 17 名（約 65%）になり、多くの学生が「特定場面ではない日常生活一般で日本語を使用したい」と考えているとみていいだろう。2021 年度の特徴としては、本年度は皆オンライン授業のため日本で生活していないので、将来コロナ禍が収まり日本を旅行した時には流暢に話したいという回答が 9 名で、日本語で書かれているもの（小説など）を読みたいと答えた学生も 9 名で、例年より多くの回答が見られた。

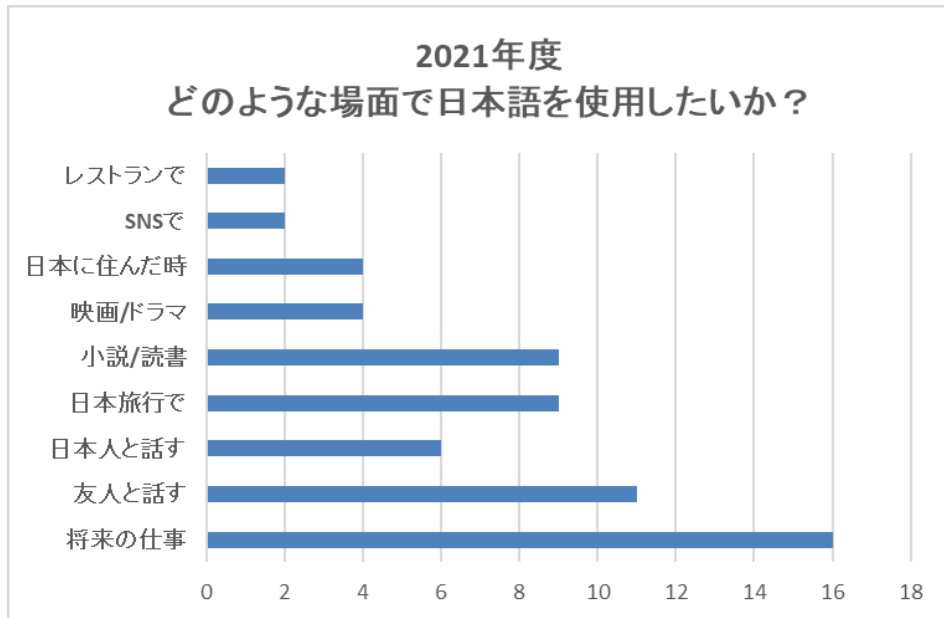


図1 「2020年度：どのような場面で日本語を使用したいか？」

さらに、コロナ禍で在宅の時間が増えているせいであろうか、日本の映画/ドラマを字幕なしで視聴したいという回答の学生が4名、日本語のSNS（TwitterやYouTube）を視聴したいという回答の学生が2名見られたことも興味深い。

今年度のアンケート調査の結果から、日本語教育文法（文型）の導入と教材作成時には、このような学生のニーズを考慮し、留学生が実際に遭遇する接触場面や文脈を重視しつつ、日本人の友人とのくだけた会話でのコミュニケーションを遂行する能力を向上させるような配慮が必要であることが再確認できた。

次に、図2で、2021年度の学生の日本語で話したいと思うトピックについて見てみよう。昨年度までは留学生に興味・関心のあること/ものについて質問していたが、本年度から留学生が「どんなトピックについて日本語で話したいか」という設問に変更した。その結果、図2を見ると、2021年度は、「漫画/アニメ」が18名で一番多かった。2020年度はK-POPなどの「音楽」が一番多かったもので、やはり、学期・年度によって学生の興味と関心は違っていることが再確認できた。「漫画/アニメ」に続き、「食べ物/料理」と「音楽」が同数の12名、次に「ゲーム」10名で続いた。「食べ物/料理」には「スイーツ」や「お菓子作り」なども含まれる。「音楽」には「歌を歌う」の2名も含まれる。「ゲーム」はビデオ/TVゲーム、オンラインゲームなどである。

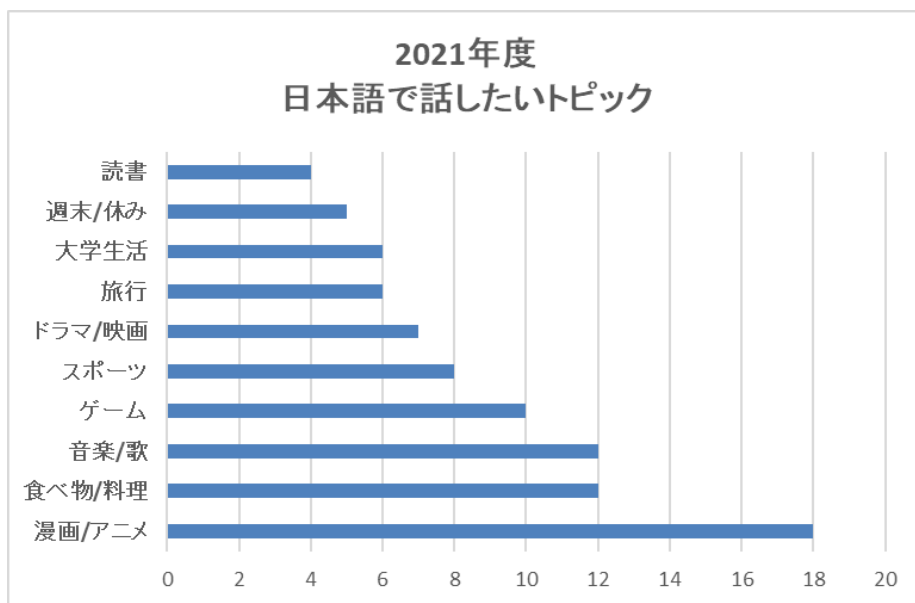


図2 「2020年度：日本語で話したいトピック」

次に「日本文化」一般の9名が続き、「スポーツ」の8名が続いている。「日本文化」には、「日本史」の1名も含まれる。「スポーツ」の内訳は、スキー2名、空手、水泳、テニス、ローラースケート、フィギュアスケート、ゴルフ、ロッククライミングである。これに、少数意見として分けていたハイキング2名、ダンス2名、ハンティング1名、ボディビル1名を加えると14名になり、「漫画/アニメ」に次いで多いことになる。次に「ドラマ/映画」7名、「大学生活」と「旅行」が同数の6名で続いている。「大学生活」には「宿題」、「部活」なども含まれる。「旅行」の6名には「日本に行ったら何をするか?」「行きたいところ」「最近行ったところ」も含まれる。次に「週末/休み」が5名、「読書」が4名で続いた。2021年度のその他の少数回答は、「将来について」「恋愛事情」「今やっているバイト/仕事」「SNS」「政治」「言語」「F1レース」が各2名で、「ペット」「宗教」「ボーカロイド」「歌舞伎」「数学」「冗談」「世界のニュース」「服」「コスメ」「ディズニー」が各1名であった。

今回の結果を見ると、例年人気が高い「スポーツ」、「映画/TVドラマ」への関心がそれ程でもなく、「漫画/アニメ」に興味がある留学生が多いことが分かった。「音楽」と「料理/食べ物」については、例年通り、高い関心を持っていることが分かった。こうしたことから、留学生の興味・関心は一定の傾向はあるものの、学期によって変

化があるので、コースで使用する教材にもそうした結果を踏まえて、適宜、柔軟に改訂を加えて行く必要があることが昨年引き続き明らかになった。

昨年（2020年度）の調査から、拙論「中級日本語教材作成のためのアンケート調査（3）」（高屋敷 2020）で、深澤・本田が海外の日本語学習者について「海外での日本語学習者は、実利的な目的よりも日本のマンガやアニメ人気を背景とした日本や日本語への興味にニーズがあることがうかがわれます。」と指摘していることを取り上げた（深澤・本田 2019）。今回の調査では、関西外大留学生別科の留学生（主として北米とヨーロッパの学生）は自国でのオンライン授業を強いられ、将来のキャリアのためにという実利的な目的だけではなく、海外の日本語学習者のニーズと同様に、「漫画/アニメ」に代表される日本文化全般への興味が日本語学習の大きな動機になっていることが再確認されたと言えよう。

3. 留学生のニーズに即した教室活動：接触場面の教材化

上述して来た 2021 年度の留学生へのニーズ調査の結果を踏まえ、関西外大留学生別科での中級日本語コースでは、学期ごとに、あるいは学期中に学生のニーズ、興味・関心を反映するように既存教材（日本語教育文法習得のための PowerPoint 教材）を書き換えることを継続して行っている。

義永は、2010 年前後を境に従来の構造シラバスを採用している教科書から「プロフィシエンシー（熟練度）」に重きを置いた「トピックシラバス」などを使用している教科書が増加したことを挙げ、日本語教材史の一つの転換期ではないかと指摘し、こうした教科書の利点として、「学習者が日々直面する実生活のニーズに合わせやすく、知的好奇心も満足やすい点」を挙げている（義永 2016）。李は、日本語教師について「教師が臨機応変に学生に対応することが大事である」と述べ、「教師は学生が興味を持っている内容を敏感に捉えて、そのニーズに応じた教材を使って留学生の進路に役立つ教室を作ることが、留学生の学習モチベーションを高めることにつながる」と主張している（李 2016）。本田は、この転換期に際し、教育機関の教材決定を担う責任者たちは「一貫して同じ構造シラバスの教科書を採用し続け」、現場の教員もこの転換を単に「練習方法の変更」として受け入れ、「それまでのドリルの繰り返しから、ロールプレイ、アクティビティなどを導入する形で変更していくことが多かった」のではないかとこの状況を批判的に捉えている（本田 2016）。本田は、この

ような状況下で、既存の構文シラバスを用いた教科書は、チームティーチングの教師が自分の担当する箇所を確認したり、学習進度やシラバスを確認したりするためのものとして使用されることが多くなっていること、学習者が授業で学んだことを後に文字で確認するためのものになっているのではないかと述べ、現場の教師たちは、「教科書を」そのままの形で教えるのではなく、「教科書で」教えるために、日々様々な努力を継続しているのではないかと指摘している（本田 2016）。鎌田は、ネウストプニーが提唱している日本語母語話者と非母語話者の間の日本語を媒介とした「接触場面」を重視し、教師は「場面（コンテキスト）あつての文化情報であり、また、場面（コンテキスト）あつての文法なのである」ことを念頭に置きつつ、接触場面の教材化の際には「文脈の文型化」とも言える焦点化（ある種のコンバーター）が必要であると指摘している（鎌田 2003）。鎌田はこのコンバーターには「活動中に生じた言語的挫折をどのようなストラテジーで修正するか、どのような非言語的メッセージが意味交渉にどのように関与しているかなど、多種多様な要素が詰まっている」ことを指摘し、教師が接触場面を教材化する過程での学習者のレベルに応じた言語活動の機能などの難易度を見極める必要性も説いている（鎌田 2003）。

関西外大留学生別科の中級日本語コースでも、以上のような様々な指摘を考慮し、留学生のニーズ調査や接触場面調査の分析結果を踏まえて、教科書の文法項目が最も自然で無理なく使用される場面を選ぶという方法を採用している。本学の留学生別科中級前期日本語コース（JPN5）では本学の教員が作成した教科書が使用されているが、この教科書（全7課）は機能シラバスを採用し、各課は、本学留学生の接触場面を重視した小会話形式の本文、単語リスト、文型（文法）説明、単語練習、文型練習等で構成されている。各課で学習する文型は、日本語能力試験 N2/N3 レベルの文型の中から、各課の本文の接触場面・文脈の内容に合う日本語教育文法を抽出し、初級教科書『げんき II』（Japan Times）を終えた中級前期の学習者（初中級）のレベルに合うようなコミュニケーションストラテジーなども考慮に入れ、教材を作成している。担当教員は授業中、教科書を開かせて授業を行うことは殆どなく、それぞれの教員が上述の点を考慮に入れ作成した PowerPoint 教材によって教室活動が進められることが多い。前述の本田の指摘の通り、教科書は、実際のところ、学習シラバス、進度／スケジュールなどの目安、宿題や試験範囲（新出単語と文型）の提示として使用されており、本文の会話練習などの教室活動を除いて実際の教室内で使用される

ことは稀である。実際の授業における教室活動では、留学生へのアンケート調査の結果をもとにあくまで留学生が望む場面を先行させ、教科書の課ごとの文型が留学生の日常生活のどのような接触場面で用いられるかを考慮しながら、学期ごとに PowerPoint の教材の更新を続けている。図 3 は、JPN5 コースで行われている PowerPoint による教室活動の一例である。これは、使用教科書『日本語会話 5』第 6 課の学習項目の一つ、「V-dic+しかない」の教材例である。留学生がこの文型を使用して行われるであろう日本人学生との「おしゃべり」を接触場面として焦点化し、日本人学生の発話に対して、「～しかない」を用いて応答する文型練習になっている。

岡崎は、構文シラバスの教科書を使用して行われる伝統的な教授法でよく用いられるパターンプラクティスが、単調な I (Initiation 切り出し)、R (Response 反応)、E (Evaluation 評価) パターン (以下、IRE パターン) に留まってしまうことがあるのではないかと指摘している。岡崎は、教師が談話を切り出し、それに学生が鸚鵡返しでの返答で答え、その解答について教師がコメント (評価) して一つの練習が終わるだけで、このようは IRE パターンでは教室外で通用する会話練習にならないのではないかと述べている (岡崎・岡崎 2001)。JPN5 の PowerPoint 教材作成時には、岡崎の指摘するような IRE パターンに終始した応答にならないように、留学生の解答にはある程度の発話の自由度を残し、フィラーや終助詞、相槌なども用い、より実際のコミュニケーションに近づけるための工夫を施してある。

発話中の「iPhone13pro」や J-POP のアーティスト「perfume」などは、学期ごとのアンケート調査の結果を見て、時世に合致した留学生の好みに合うようなものを考え、随時、変更をしている。また、「半額」「終電」など使用教科書の本文に出て来る新出単語も同時に取り入れ、いくら留学生の興味・関心を取り入れると言っても、使用教科書から大きく逸脱することを避けることにも留意している。

図 4 は、第 3 課の学習項目「～なんて」のための教材例である。この教室活動も日本人学生のそれぞれの発話に対して「～なんて」を用いて答える応答練習であるが、教材例 1 と同様に、IRE パターンの単なる機械的な応答にならないように工夫してある。「～なんて」に続くコメント部分は、「すごいね！」の代わりに「まじで?」「うそでしょ?」「いいなあ。」などのように留学生が感じたことを自由に選んで言えるようにしてある。

Q:

1. 見て！ iPhone13proが半額(はんがく)だよ。
2. 今だけ、BigMac が200円だって。
3. 外大祭(がいだいさい: Gaidai School Fes.)に「Perfume」が来るんだって～!
4. え？ まさか PC、壊(こわ)れちゃったの？
5. 明日、レッスンテストだよな？
6. え？ 財布(さいふ)、忘れちゃったの？
7. 知ってた？ 今日は_____さんの誕生日(たんじょうび)だよ。
8. あ、終電(しゅうでん)が行っちゃったよ。
9. Your own comment

やったー！ じゃあ、
_____しかないね！

or

うん、だから、
_____しかないよ/ね。




図 3 教材例 1 : 「～しかない」の教材例

Please respond to the following comments by using ～なんて.

e.g. 昨日のテスト、100点(てん)とったよ！

⇒ わあ、_____ 100点、とる _____ なんて、すごいね！
aizuchi the Verb-short/present comment

1. ゆうべ、大阪のクラブで、BTSのメンバーを見たよ。
2. JLPTのN1テストに合格(ごうかく: to pass) したよ！
3. ビッグ・マックを三つも食べたよ！
4. 週末、富士山(ふじさん)に登(のぼ)ったよ！
5. 今日はスタバのラッテを8杯(はっぱい)も飲んだよ。
6. このスマホ、半額(はんがく)で買ったよ。
7. 昨日買った自転車(じてんしゃ)がぬすまれちゃった！
8. 明日の晩、_____ちゃん/くんとデートするんだよ。
9. iPhone13pro を買うために並(なら)んだんだけど、売り切れ(sold out) だったよ。
10. Your own!

WOW!




図 4 教材例 2 : 「～なんて、～。」の教材例

この教材でも、やはり、毎学期の留学生へのアンケート調査の結果から K-POP のアーティスト「BTS」を取り入れるなどその時の時世や流行、留学生のニーズに合わせて留学生の反応がよさそうなトピックに合わせるように留意している。また、関西外大のキャンパス内にはマクドナルドとスターバックスコーヒーがあるので、そのような接触場面も考慮し留学生が大学生活で実際に遭遇しそうな文例を考えて取り入れるようにしている。また、この教材でも、留学生の好みの文例ばかりに偏ることなく、「半額」「並ぶ」「売り切れ」「点を取る」など使用教科書の新出単語も同時に取り入れ、日本人学生との談話の文脈の中での新出語の使用例を示すことで使用教科書の本文理解にも繋がるような教室活動になるように作成してある。

4. おわりに

本学留学生別科では、引き続きコロナ禍の影響で、2022 年度春学期もオンライン授業で行われることが決定された。2022 年度中に対面授業ができるかどうか、現時点では未定であるが、対面授業が再開された際には、2020 年度から中止を余儀なくされているログシートによる日本語接触場面調査や質問紙のアンケート調査の結果についてのフォローアップ・インタビューも行う予定である。日本人の友人をはじめとした日本人全般との「おしゃべり」を焦点化した接触場面において、留学生がどのようなコミュニケーションストラテジーを必要としているのかについて更に詳しく調査していく予定である。

野田は、日本語学の悪影響を受け体系的、形式的に偏っている現行の日本語教育文法について再考を促している。野田は、これからの日本語教育について、「日本語教育をコミュニケーションの教育に変えていくためには、言語学的な研究から出発し、その論理で教育内容を決めるというやり方をやめなければいけない」と述べ、学習者が実際に「日本語を使う状況から出発し、その状況でどんな能力が必要かを考えて教育内容を決める」ことを提唱している。野田は、この状況を受け、これからの日本語教育については、コミュニケーションの場面を 4 技能（読む、書く、聞く、話す）別に分けて研究を進めていくことを提言している（野田 2012）。このような日本語教育の状況について、庵は、日本語学に根ざした「日本語記述文法」からの脱却を図り、日本語教育では何が必要かを考えた「日本語教育文法」を確立するための様々なアプローチについて提言を行っている。一例として、理解レベルで終始してしまう

日本語記述文法から、学習者が文法規則の意味を理解した上で実際の場面で使えるようにするための「産出レベルでの文法」への脱却を図るための区別についての指摘がある。更に、コーパス、学習者のニーズ、教科書のタイプなどからの視点で現行の初級／中級文法シラバスを見直す研究を進めている(庵・森 2011)(庵・山内 2015)。初級日本語教科書『J. BRIDGE for Beginners』の著者である小山は、従来の知識重視の文法積み上げ方式の教材からの脱却を図るために、学習者のプロフィシエンシーを重視し、トピック・ベースのシラバス・デザインを提唱している。学習者が接触場面でどのような文法や語彙を使用して話せばいいのか自ら気付かせるためには、「文法や語彙を特定の[話題]に埋め込んで提示するのが効果的」だと述べている(小山 2008)。

今回のアンケート調査の結果からもわかるように、学習者のニーズや日本語で話してみたい話題(興味・関心)を見てみると、今まで以上に多様化や細分化が進行しているように思える。オーディオリンガル・メソッド(ALM)からコミュニカティブ・アプローチ(CLT)の時代を経て、私たち日本語教師は、日々の教材作成において、学習者が必要とする接触場面からのニーズを把握し、前述した様々なアプローチ・教授法から応用できる部分を使用し、自分の学習者に合致するように教材の更新を続けていく必要があると思われる。学習者の興味・関心、ニーズが短いスパンで変化、流動する状況下で学習者の視点から教材を作成するには、今後、より精密なニーズ調査、接触場面調査とその分析結果に基づいた日本語教育文法、シラバス・デザインの見直しも不可欠になって来るであろう。今後も学期ごとの留学生へのアンケート調査を続け、留学生が真に望む日本語接触場面を分析し、そこからのコミュニケーション能力やコミュニケーションストラテジー・ストラテジーを養成するための教材作成を継続していければと考えている。

参考文献

- 庵功雄・森篤嗣(2011)『日本語教育文法のための多様なアプローチ』ひつじ書房
庵功雄・山内博之(編)(2015)『データに基づく文法シラバス』くろしお出版
岡崎敏雄・岡崎眸(2001)『日本語教育における学習の分析とデザイン 言語習得過程の視点から見た日本語教育』凡人社
鎌田修(2003)「接触場面の教材化」宮崎里司・ヘレン・マリオット(編)(2003)

- 『接触場面と日本語教育—ネウストプニーのインパクト』明治書院
- 小山悟 (2008) 「プロフィシエンシー重視の教材開発—トピック・ベースのシラバス・デザイン—」 鎌田修・嶋田和子・迫田久美子 (編) 『プロフィシエンシーを育てる—真の日本語能力をめざして—』 凡人社
- 西郷秀樹・清水崇文 (2018) 『日常会話がグーンとアップする雑談指導のススメ』 凡人社
- 高屋敷真人 (2019) 「中級日本語教材作成のための接触場面アンケート調査」 『関西外国語大学留学生別科日本語論集』 28 号、49-65.
- 高屋敷真人 (2020) 「中級日本語教材作成のための接触場面アンケート調査 (2)」 『関西外国語大学留学生別科日本語論集』 29 号、31-45.
- 高屋敷真人 (2021) 「中級日本語教材作成のための接触場面アンケート調査 (3)」 『関西外国語大学留学生別科日本語論集』 30 号、47-57.
- 野田尚史 (2012) 『日本語教育のためのコミュニケーション研究』 くろしお出版
- 深澤のぞみ・本田弘之 (2019) 『日本語を教えるための教材研究入門』 くろしお出版、67-68.
- 本田弘之 (2016) 「[教科書で教える] とはどういうことか—これからの日本語教材研究」 吉岡英幸・本田弘之 (編) 『日本語教材研究の視点—新しい教材研究論の確立をめざして』 くろしお出版
- 義永美央子 (2016) 「第二言語習得研究からみた教材」 吉岡英幸・本田弘之 (編) 『日本語教材研究の視点—新しい教材研究論の確立をめざして』 くろしお出版
- 李曉燕 (2016) 「教材を使う授業の意義」 吉岡英幸・本田弘之 (編) 『日本語教材研究の視点—新しい教材研究論の確立をめざして』 くろしお出版

(mtakayas@kansai.ac.jp)